

平成22年度第2回屋久島世界遺産地域科学委員会
ヤクシカ・ワーキンググループ 議事概要（案）

【議事要旨】

■開会

- 九州森林管理局局長より開会の挨拶。
- 事務局より、委員、特別委員、関係者の紹介。
- 事務局より、議事次第・資料一覧について説明。

■議事

(1) 第1回ヤクシカ・ワーキンググループにおける主な意見等について

- 矢原委員長より「資料1」に基づき、第1回ヤクシカ・ワーキンググループにおける主な意見等について説明。
- 委員からの個別の意見や質問はなかった。

(2) 関係者からの意見徴収及び質疑について

(2) - 1 揚妻准教授の意見について

- 揚妻准教授から「資料5」に基づき、屋久島の自然生態系におけるヤクシカについて説明。
- 委員からの個別の意見・質問とそれに対する返答は以下のとおり。

① 絶滅危惧種への影響について

【意見】 屋久島の希少植生が、ヤクシカに食われ激減していて、ヤクシカの管理をしないと、世界遺産の中で固有種が減ることが危惧される。ヤクシカの個体数が増え、それが絶滅危惧種の分布に影響していることはコンセンサスが得られてきたのでは。

【返答】 30年前と比較し希少植生が減少しているという論点に疑問がある。30年前は、ヤクシカが激減して20年程度経過した段階で、屋久島の生態系の中では特殊な時期であった。その時点からの変化を見て物事を考えるのは難しい。

② 過去のヤクシカの生息数について

【質問】 グラフの1950年のデータは、どの程度確かな数字なのですか。

【返答】 1950年代のシカの捕獲数をもとに算出している。当時の捕獲数は1,000頭を下らなかったため、コンスタントに1,000頭獲れると仮定し、シカの最大増加率を勘案し、最低限物理的にこの位ないと1,000頭獲り続けることは無理だという数字。安定している

という結果。

【意見】 雄ばかり獲っていた可能性もある。仮定によって求めた推定値を、確定的なものとするには、議論の余地がある。

【返答】 50年代に1,000頭以上獲れていたものが、60年代末に50頭しか獲れなくなった。20分の1に減ったことは確実。数字の問題はあるにしても、それ以前に、シカの密度が変化したことは事実。

③ 他地域の林床状況との比較について

【意見】 和歌山の森林における被害状況と比較しているが、島外とは条件が違うので比較するなら島内との比較が適切。

【意見】 屋久島の南部地域は、ここ10年それほどシカが増えず、林床の絶滅危惧種もあり、樹冠が100%覆っている森林があるので、そういう場所と比較すべき。

【返答】 和歌山については、屋久島と同じ照葉樹林帯に属する古い森林で、林床植生が多く残っている場所があることも事実、それを知ってほしかった。

④ 生息地管理について

【意見】 被害防除のための農地環境整備は、生息地管理という言い方もでき、重要な観点だと思う。

⑤ ヤクシカのDNA分析について

【意見】 永田地域と西部地域とで、ヤクシカが遺伝的に違うという分析は、サンプルが少なく、まだ断定できないのでは。

【返答】 マイクロサテライトDNAとミトコンドリアDNAのタイプが異なっていて、また、DNAハプロタイプの頻度が違っているという現状の研究成果である。行動系のデータでもあまり動かないという結果であり、永田側ではデータが揃ってきて、西部と永田とのシカ同士の交流はなさそうだ。

【意見】 定着的というのは支持できるが、西部側のデータが少ない点と、現時点で断定的に言うと、永田の住民の方は驚かれると思う。

⑥ 生息を規定する因子について

【意見】 農地で増えていないという報告だが、反対に、農地周辺では栄養状態のよいシカが多く見受けられる。農地でたくさん食べ栄養状態がよくなり、妊娠率も高くなって増えていると考えられる。

【返答】 シカの調査地点からある程度の範囲を区切って、その中に農地がどれだけ入っているかという分析をしたら、農地との関係性はなく、周りの森林、特に広葉樹林との関係性があったので、農地で増えないとした。実際、農作物被害が出るのは季節的に集中し、また全体の食物に対する農作物の占める割合が低いのでこういう結果になったと思う。ただし、全体に占める農作物の割合が低いからといって農業被害が少ないという話ではない。

【意見】 生息を規定する因子として、分析のストーリーはわかりやすいが、方法論に規定されているところが大きい。特に、駆除や野イヌで減らないという結果は、誤解を招く。

【返答】 駆除は、高密度のところで行うので、そこそこ獲っただけでは効果が出にくい。

【意見】 また、野イヌがいるところと、いないところで分析しているが、実際の機能やメカニズムは、野イヌが飽食しているという事例もある。このGLMモデルの結果から、こういう表現をするのはいきすぎである。

【返答】 そういう指摘に配慮すると、検証のしようがない。いつまでたっても因果関係がわからない。わかる範囲でやれることをやるのが基本。西部においては、野イヌの群れがシカを追いかけ回すのは、十数年前は見られなかったが今は普通に見られる。そのため、実際に野イヌがシカを倒しているから減っている印象が強くなるが、印象でものを語るのは危険である。

【意見】 野イヌが増えたというのは、地域的な西部周辺の状況なので、全体的にはかなり減っていると思う。

【返答】 野イヌは、昔は完全に放し飼いで、飼い犬が勝手に狩猟に行っていた。そのため、野イヌという定義が難しいのと、かつての飼い犬の状況がどうであったかを論議に加えた方がいい。

【意見】 駆除で減っていないのは、密度の高いところで一生懸命駆除をやっている、減った効果がわかりにくい可能性はある。駆除をやっているところ、やっていないところなど、もっと小さいスケールで見たら効果が出るのではないかと思う。

【意見】 本土の研究成果によると、単純に広葉樹林であるというより、フラグメンテーションによって境界領域が餌供給部分になるので、境界領域延長をパラメータに入れた解析を進めている。その結果、南九州の本土部分では、広葉樹林の絶対面積があるところのほうが、個体数が抑えられ、植林が入ってフラグメンテーションが進んだところほどシカが増えている。

(2) - 2 牧区長の意見について

○ 牧区長から「資料6」に基づき、屋久島における植生等へのヤクシカ被害状況について説明。

○ 委員からの個別の意見・質問とそれに対する返答は以下のとおり。

① 家庭菜園や庭木への被害について

【質問】 被害統計では、基本的には換金作物の申告された被害額しか出てこないが、実際に屋久島での被害を見ると、家庭菜園や庭木の被害が多い。それらの被害評価はできないのか。

【返答】 家庭菜園や庭木の被害は、把握できていない。状況として、農家規模が小さく、家庭菜園や果樹へのシカによる被害が、相当増えた。これは身近な問題であるが、統計上は整理されていない。

② シカの増えた時期について

【質問】 現在、シカは相当増えた印象なのか。

【返答】 以前は、シカをほとんど見ることがなかったが、ここ数年はシカを見ない日はな

い。毎日シカに出会う。そういう状況からもシカが非常に増えた。シカが見られなかった時期は、10年ぐらい前まで。それから徐々にシカが非常に目立つようになってきた。

③ 被害作物について

【意見】 大隅半島のサルによる事例では、家庭菜園型農地の被害実態が上がってこないにもかかわらず、ものすごく散在していて、そこからの栄養供給がかなりある。また、特徴としては、最近ものすごく農作物の被害項目が増えている。今まで手を出さなかったものが、被害が進化すると項目が増えていく。

【返答】 楠川地区にて、特に被害が多いのは、ガジュツ（薬草）とカライモ、また、ミカンの樹皮の剥皮が多い。

(2) - 3 塩谷参事の意見について

○ 塩谷参事から「資料2」に基づき、ヤクシカの全島個体数及び地域別個体数の推定について説明。

○ 委員からの個別の意見・質問とそれに対する返答は以下のとおり。

○ ヤクシカの移動経路等について

【質問】 現地調査結果では、林道沿いの方が天然林内よりシカ密度が高かったが、テレメをつけた個体が林道に近づく時間帯や特徴というのはあるのか。明け方などの餌場に行くときに林道に近づくのか。

【返答】 シカに取り付けたテレメデータが、ダウンロードできる距離まで近づくのが、明け方と夕方に多い。調査者は、林道沿いでダウンロードしているが、それに近づいてくる時間がその時間帯になる。そのため、林道が基本的な餌場やアプローチ経路になっている。

(3) ヤクシカの頭数管理等について

(3) - 1 ヤクシカ地域管理案について

○ 事務局より「参考資料1」に基づき、ヤクシカ被害への対応の基本的な考え方（第1回 ヤクシカ・ワーキンググループ資料）について説明。

○ 松田委員より「資料3」に基づき、ヤクシカ3地域管理案について説明

○ 委員からの個別の意見・質問やそれに対する返答は以下のとおり。

① 委員長からの補足について

・ この提案は2006年、まだヤクシカを管理するということに関して合意ができていない段階で、とにかくこういう形であれば、ある程度、科学的な裏づけのもとに管理というのは可能だということを示すために提示した資料である。

・ 当時は、個体数が非常に多く現実的な頭数管理が困難な西部を捨て、地形的、体制的に管理しやすく、まだ希少種も残されている、東北部にて順応的管理を進めていくというス

トリーを提案した。

・その後、世界遺産地域として評価の重要なポイントになっている西部をどうするかということが大きな課題になってきた。また、捕獲技術が向上し、大規模な頭数管理が可能になってきている。

・そこで、それらの現状に合わせ、この科学委員会として考えていく必要がある。

② 過去のヤクシカの生息数等について

【質問】 捕獲統計のところ、60年代どんどん減っていき最後は50頭まで獲って禁猟になったが、減った要因は乱獲なのか。そうすると、その当時のヤクシカの個体数は300頭や400頭というレベルだったのか。

【返答】 そう考えられる。

【意見】 例えば、300～400頭が500平方キロの山岳の島に散って行って、果たして、猟師が100頭、50頭を1年間に捕獲できるか。厳しいと思う。屋久島の猟師に昔の話を聞くと、乱獲をすごく戒めていた。そのため、乱獲で減らしたというふうには考えたくない。

【質問】 ヤクシカが減少したのは、何が原因と思うのか。

【返答】 森林の伐採、特に広葉樹林伐採が大きかったと思う。

【意見】 西部で見ている感じだと、上限に達したのかなど。キャパシティーに達したら増え続けない。また、減らすと密度が下がって増加率が上がるのでは。

③ 広葉樹の伐採についての意見

・激減した理由が広葉樹の伐採ということだが、九州の本土では、広葉樹を伐採するとシカの餌場が増えると言われている。また、屋久島の人工林率は2割程度で、その程度のウェイトで急激に減るとは思えない。

・ヤクシカが何に食物依存しているかということ、広葉樹の落ち葉のウェイトが高く、一方、西日本などでは広葉樹が食物に占める割合は増えてくる。屋久島に関しては、それが一番顕著に現れている。木が小さければ、落ちてくる葉っぱや果粒は少なく、若齢林があっても十分な餌が供給できない。広葉樹二次林は、伐採後二次遷移が始まる。二次遷移の最初の5年ぐらいは草などが生え、本州のシカなどに対しては一時的に食物が増えるが、その後は減ってきて、もとの状態に戻るのに数十年から100年ぐらいかかる。伐採直後と成熟した森林の状態では、全体的に生産性がかなり違ってくる。

(3) - 2 ヤクシカの密度管理とモニタリングの考え方について

○ 立澤委員より「追加資料」に基づき、ヤクシカの密度管理とモニタリングの考え方について説明

○ 委員からの個別の意見は以下のとおり。

① モニタリングやサンプリングについて

・提案意外に、低コストでやれる方法として、狩猟カレンダーによる目撃効率の調査がある。これを狩猟あるいは有害鳥獣捕獲の際にやってほしい。最初は定着しづらいが、定着

していけば目撃効率がよくなる。

- ・ 移動の実態把握期間が今までは大体1年ぐらいであったが、この期間だと分散の過程は追えない。そのため、複数年、測位の間隔をかなり落として追跡することが必要。
- ・ サンプルングは、1歳の成長と妊娠率が大きな意味を持つので留意する。
- ・ 移動実態に関しては、自動カメラによる安価な調査法もある。
- ・ これからもっとふるいにかけて、やれること、やれないことを整理し、きちんと屋久島ではこういうモニタリングをやっています、ということが言えるようにする必要がある。
- ・ それぞれの事業でとったデータをお互いに共有して、全体として統合的な評価に使えるような形にする。

② 過去の推定頭数について

- ・ 資料5のヤクシカ増減の図の黒い点は、昔、鹿児島大学の太塚先生が狩猟効率から頭数推定をした数値を用いている。昭和30年代に平方キロメートル当たり4,800頭という推定頭数が出ている。しかし、その数値には狩猟データの整理にあいまいなところがあり、捕獲記録が県の記録と合っていないので引用間違いの可能性はある。

(3) - 3 ヤクシカの密度管理とモニタリングの考え方について

- 事務局より「資料4」に基づき、平成22年度ヤクシカの有害鳥獣捕獲による捕獲数について説明
- 委員からの個別の意見は以下のとおり。

① 現在の捕獲数について

- ・ 森林管理署でこれまで352頭捕獲しているが、すべて職員がくくり罠で捕獲した。猟友会への委託はしていない。通常事業の合間や通勤途中に罠を仕掛け回収しているので、サンプルングは難しい。
- ・ 森林管理署では、500頭の捕獲目標に対して今352頭獲った。捕獲の工夫として、餌にカラスザンジョウの葉を用いている。これを罠の近くに置くと、けもの道でなくても引かかる。当初より効率的に獲れているので、年内に500頭を超えるかもしれない。
- ・ 上記の500頭では全然足りなくて、フィージビリティスタディ（実行可能性や実現可能性を検証する作業）だと思っている。今後、労力をかければどのくらい獲れるかわかった時点で、例えば、どこに集中して、何頭獲ればこの地域は確実に減らせる。という算段を立てた上で進めていくことが必要。

② 捕獲時のモニタリングやサンプルングについて

- ・ 捕獲時のモニタリングは、どう位置づけているのか。森林管理署では、島の東部、南部、西部にて獲っているが、獲るに当たって、獲って増減がどうなるのか、ライトセンサスか糞粒法等にて月1回ずつずっと調査していくかなりの経過措置が必要と思う。そのことにより、後々大問題になるであろう西部地区に対する対応の仕方などの役に立てる。
- ・ 猟友会が言うには、最近ヤクシカが大きくなっている。しかし、体重等の記録がない。

将来のシカ肉利用を考えた時、全島調査は困難だが、体重等も把握する必要がある。森林管理署では無理だが、猟友会の協力は得られないか。

- ・ 町では、平成 23 年度にシカ肉処理・加工施設をつくる予定だ。その中で、搬入時に体重測定等が可能になる。加工施設にて、どういうモニタリングがどれだけ可能かについては、猟友会と協議し検討する。

- ・ 箱罾とくくり罾別の捕獲数を整理しておく。

- ・ 個体群シミュレーションを行うパラメータとして、妊娠個体の齢査定が必要になる。体重測定と合わせ、齢査定用の門歯のサンプリングも必要。ただし、全ての個体を対象にするのではなく、一部の個体データでよい。また、DNA分析用サンプリングも必要。一部の簡単な部位、例えば、下あごをサンプリングしてそれを齢査定に利用し、その付着肉をDNAサンプルとして冷凍保存しておく。そのようなシステムを検討する。

- ・ また、マーカールと捕獲実態について分析すれば、作業評価が可能となる。何人が、どんなふうに動いたか、という記録や、どのぐらい捕獲罾が暴露されたかということが推定できるやり方を検討する。

- ・ 何人で、何箇所かの罾で、何日でこの数が捕獲できたのかの資料を整理する。捕獲効率や作業評価を行う際の基礎資料となる。

- ・ 森林管理署の捕獲個体についても、サンプリングが必要である。ただし、労力的に大変な場合は、集中捕獲日を設け、サンプリングしたい学生等にサンプルを提供する等の仕組みも考えられる。

- ・ CPUE (Catch Per unit effort : 単位努力量当たりの捕獲量) が必要なので、罾の数と日数を揃えたデータを整理し示してほしい。また、単に北東部、東部というまとめ方でなく、集落別や林道別等の細かい捕獲場所のデータが必要。

- ・ 森林管理署としては、例えば、何個体、こういう形でサンプリングすると学問的に意味があるという情報がほしい。それを元に、取り組み方等を委員と相談する。

- ・ せっかくシカが獲れているので、齢査定やDNAのサンプルを採取し、科学の研究に役立て結果としてヤクシカの管理に役立つという方向での協力を得たい。これに関しては、この場で議論するより今後個別に詰めていったほうがよい。

- ・ また、今後、目標を設定し、もっと多く獲っていくとき、どのぐらいの労力をかければどのぐらい獲れるという裏づけがあれば、より説得力のある捕獲管理計画ができる。特に、3分割案を考えた場合、それぞれの地域でどのぐらい捕獲効率が違うかということが知りたい。

③ 今後の検証について

- ・ 研究する側の仮説や仮定の不確実性も内包していて、実際に管理を進めていくため、順応的な原則でいくとすると、今ある最大限の議論を尽くした上で得られる情報から出発するしかない。

- ・ 順応的な原則における検証には、シカ個体数とともに、植物がどうなったかというのも同時に検証していくことが重要。その際、モデルだけにとらわれずに、アナログ的な資料も含め総合的に検討していく。

- ・ 植物の検証は、これまでの研究ベースで各所にプロットが設置されているので、既存の

プロットのデータの収集と活用も考えていく。

- ・ また、今後、モニタリングを設定していくとき、どこを見ていったら、いろいろ出ている仮説のどれを採択すべきか等の検証ができるデザインを考えていく。
- ・ さらに、現場の事業実施者に対し、組織として業務の内側で上記のような資料収集（モニタリング・サンプリング）が必要なのだという認識を、徹底していく必要がある。
- ・ 植物に関し、次回の目標頭数の議論を深めるのであれば、矢原委員長のデータが活用できる。全島の絶滅危惧種の分布についてのデータがあり、270 地点におけるトランセクトの記録もある。ある地域で、例えば、あるレベルの捕獲をし、個体数を下げた場合に、絶滅危惧種の生育個体数や成長にどのように反映されるという検証は可能だ。

④ 遺産地域の基本スタンスについて

- ・ 1993 年に屋久島が世界遺産に認められたが、今回、その当時にさかのぼって森林生態系のモデル体系の形は維持していかなければいけないのでは。
- ・ シカがどのような影響を与えているか。1993 年時に密度がどのくらいで、森林植生がどのくらいあったのか。その状態を責務として守りたい。そのためには、シカをどのように管理していったらいいのかというのが、ヤクシカ・ワーキンググループに与えられている大きな役割の1つと思う。そういう観点も踏まえ、アドバイスがほしい。
- ・ 世界遺産の評価として、景観的な観点からの評価と科学的な価値と2つあった。景観的には、自然度の高いスギが、他地域ではなくなってしまった天然林が、小さな島の標高2,000メートルの中に成立している。もう一つは、低地の照葉樹林から山地の高標高地のササ地まで植生がずっと連続していて、その中に固有種も見られ、進化の研究や水文学の研究など、科学の研究にとって非常に高い価値がある。その2点が評価された。また、さらに追加すれば生物多様性の価値もある。
- ・ そういう評価に照らして、屋久島の固有種が絶滅するとか、あるいは、非常に自然度が高い照葉樹林からヤクスギ形成林、花之江河の湿原などを含めて、植生が連続しているということが損なわれるということになると、危機遺産にするかどうかという議論になりかねない。
- ・ 全体として世界遺産の評価基準に照らし、どのような目標を設定していくかというのがこれからの大きなテーマであり、しかも、急いである程度の合意に達しなければいけない。

⑤ 目標頭数や管理目標について

- ・ 目標頭数に関し、南部では10年間ほとんど個体数が変わらず、およそ平方キロ20頭である。それが一つの目安になるのでは。
- ・ 管理に関し、人間の基準でコントロールするという適正概念は、よい方法とは思えない。野生動物は、その環境に応じてそこに生息している。目標頭数や適正という言葉の中には、人間がある程度自由に決める部分があり、どれだけ科学的根拠が持てるのかわからない。
- ・ 管理目標について、個体群の目標、地域、地区ごとに決めるべきだという意見があるが、それが何によるものなのか、それは稀少植物の絶滅を防ぐためなのか、それとも農林業被害を減らすためなのか、あるいは森林の構造を変えなければいけないというところを目標にするのか。どの視点での目標なのかというのがかかわってくる。

・ 定性的な目標に関し、1として、少なくとも屋久島から種の絶滅を防ぐということに関しては合意されている。それから、2として、森林の更新を阻害させない。ヤクシカの摂食によって更新が阻害されているかどうかという判断が重要になるが、定性的な考え方として、森がきちんと維持されているということ。3として、農業被害を軽減させる。という3点がある。

・ 絶滅危惧種だからと、葉っぱ1枚たりとも食べられてはいけいけいではなく、1年間の生長力がわかるので、個体の死亡に影響しない程度の摂食というのが本来の姿であり、そういう配慮を含め、今はどんどん食われて個体数が減っていつている状態なので、それを均衡するような状態にもっていく。

・ 更新に関しては、森林の更新にとってシカの影響がどうなのか、影響ある。ない。という判断について、科学者の間で詰める必要がある。

・ 資料5によると、ヤクシカは1950年代に1万2000頭いて、1970年代に1000頭くらいに激減し、現在1万2000～6000頭という。2000年からずっと増えている。1970年代に激減した当時の植生に戻せとは言わない。1993年くらいの密度が現在の半数とすると、既にシカの食害が始まっていてもう少し低いほうがいい。まずは半数くらいのイメージか。【松田委員案】

・ 南部の、比較的10年にわたって安定してきたレベル。そこだとシカも、増えもしないけれど、大きく減りもしない。それだったらきちんと存続していく条件がある。種の個体、植物のほうも大きな変化がない。そういう状態が一番望ましい。これは一つの考え方であり判断材料と思う。【矢原委員長案】

・ 1998年頃、西部の海岸部にはササやぶ広がっていてシカをめぐって見なかった。1993年よりも少し前が、シカが低密度でいたイメージである。

⑦ 西部地域の取り扱いについて

・ この委員会自体は、シカを減らすことが目標ではなく、森林をいい状態にしたい、という目標でやっているが、今までの議論からは、その目標がよくわからない。具体的には、西部の世界遺産地域、特に標高の低いところをどういう森にしたいのか、というのがよくわからない。その目標がよくわからないと、何でシカをどれだけ獲るとい議論になるのか、漠然と不安を感じる人も多い。そのため、希少種が減らないようにするのか、あるいは森林の構造を守るということに目標を置くかによっても、この後どうするかということが変わってくる。その辺の合意形成が必要と思う。

・ 世界遺産に設定された当時の状態をキープするのはあり得ない。というのは、世界遺産の標高の低い地域は、ものすごく人手の入った場所であり、まだ更新しているところもある。そういう意味で、過去のある時点にもっていくというのはいないと思う。そうすると、一体、理想的な形というのがよくわからない。わからないけど何かみんなが合意できるようなよい森林の形を目指さなければいけない。特に過去、人の手がかかり入ったところが、実際にシカの密度の高い地域である。そういう森をこれからどうしていくのか、世界遺産の森をどうしたいのか、ということ意識して議論する必要がある。

・ 後で出てくる生態系維持回復事業計画等では、西部の森のあるべき目標について、事業として既に目標を決めているが、それが説明できる状態ではない。

- ・西部の環境というのは非常に大きく変化していて、それを放っておくだけでいいのか、という危機感を持っている。そこで現在議論しながら詰めている。今後は、資料等をオープンにし、理解を深めていきたい。
- ・森林は、常に遷移しているが、世界遺産に指定した時点を維持するのがいいかどうかという指摘はある。ただし、森林の更新、高木の主要樹種の更新に影響が出ているかどうかという点について、今後、もう少し議論を詰めていきたい。なお、林床植生に関しては大きく消失したというのは間違いない。また、どの程度の林床植生にする状態が望ましいのかという話は、もう少し詰める必要がある。
- ・遷移がある中での世界遺産のあるべき姿という前提で議論を進める必要がある。

4－（４） 屋久島生態系維持回復事業計画（案）について

- 事務局より「資料7」に基づき、屋久島生態系維持回復事業計画（案）について説明
- 委員からの個別の質問とそれに対する返答は以下のとおり。

【質問】 この計画による捕獲等の事業を行う場合、農水省、環境省の事業でやっていくのか、あるいは県や市町村の役割としてやっていくのか。

【返答】 基本的には都道府県が管理していくが、国立公園及び世界遺産でもあり、環境省、林野庁等の事業も関わっていく。

【質問】 本省同士で調整される段階で、大きな修正された点は。

【返答】 モニタリングのところで、土壌浸食の状況の把握が新たに入ったこと以外は、大きな変更はない。

4－（５） その他

- 事務局より「資料8」に基づき、今後のスケジュール（案）について説明。
- 事務局より「参考資料4」に基づき、ヤクシカWGのメーリングリスト一覧表について説明。
- 事務局より「参考資料5」に基づき、第1回ヤクシカWGの概要（九州局HP）について説明。
- 事務局より「参考資料6」に基づき、屋久島森林環境シンポジウム（案）について説明。
- 委員からの個別の意見や質問はなかった。

5 閉会